47　江戸幕府御典医関東船橋氏の略史

奥富敬之

江戸幕府の御典医を代々勤めた関東船橋氏は、非常な名門であった。第四十代天武天皇の皇子、舎人親王の系統で、左大臣夏野の代で臣籍降下して「清原真人」と賜姓されているから、天武清原氏ということになる。

以降の歴代は明経道をもって朝廷に仕え、大外記あるいは侍講などを家職とした。歌人として有名な元輔、清少納言父娘のほか、広澄、宣賢などの学者が輩出している。しかし中世には、他の公卿家と同様に、やはり衰微している。

これを再興したのが、織豊期の秀賢だった。織田信長・豊臣秀吉・徳川家康などと朝廷との間を周旋して功を樹て、蔵人左近衛少監から式部大丞を経て明経博士兼式部少輔に昇り、後陽成・後水尾両天皇の侍読にも挙げられ、ついに従四位上を極位としている。この間、山代国船橋保（大山崎町）を領したので、舟橋氏に改氏している。

以降の歴代は京都にあって代々の天皇の侍読を勤めた。舟橋氏十三代目の逐賢の代に明治維新を迎えるや、ただちに華族に列っせらて子爵を授けられ、その子明賢は大正天皇の侍読にも挙げられている。この系統を、京都舟橋氏という。

これと対称的だったのが、関東船橋氏である。舟橋秀賢の末子元理が江戸に下って徳川家康に仕え、最初は江戸幕府の対京都政策の顧問のような地位につき、しだいに医を家業にするようになり、ついには以降の歴代は江戸幕府の御典医となったのである。「船橋」と名乗って「舟橋」でなくなったのは、京都の宗家を憚ったものらしい。

厳密に云うと江戸幕府の御典医としての船橋氏の初代は、元理の長男玄皓だった。元禄三年（一六九〇）九月二十三日、五代将軍綱吉から「医術に長ぜるをもって召し出され」て寄合医になり、蔵米二百俵を給されることになったのである。翌四年七月十九日に奥医に加えられ、同年九月晦日には御匙に昇り十二月二日には法眼位に叙

せられた。そして翌五年十一月二十一日、六十一歳で死んだ。法名は日寿。江戸雑司ケ谷の法明寺に葬むられた。いまも法明寺には、船橋氏の墓所がある。

御典医二代目の玄恂の代に五百石に加増されると同時に、従来の蔵米取りを改めて知行所采地給与になり、のちにさらに二百石を加増されている。御典医十一代目の宗恂の知行地は『旧高旧領取調帳』に次のように示されている。

相模国大住郡

西金目村　——

日向村　八一石四九六〇

大句村　一二四石九五六〇

小鍋島村　三五石五一九四

南金目村　四二七石九一五〇

武蔵国都筑郡

恩田村　五四石四九七五

上星川村　一八三石四二八〇

総高九〇七石八一一九〇〆

（日本医科大学）